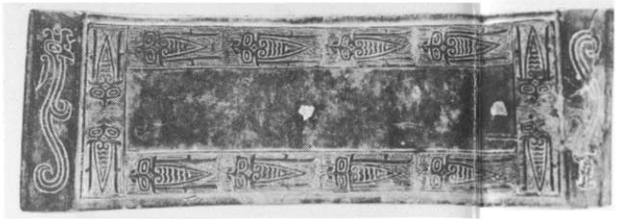
残像抄（1）

— 蝉 —

大和文華館　館長　石澤正男

（1）芮伯壺（ぜいはっこ）　永青文庫所蔵



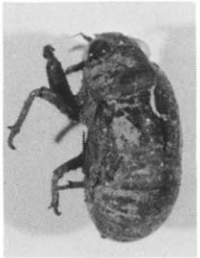
（2）饕餮蟬紋俎　泉屋博古館所蔵

家から一歩外に出て外気に触れると、その途端に風のさわやかさを肌に感じる季節になりました。新緑の木々の間を縫うようにして流れてくる風の感触は快いものですが、ふと咲き始めた真白な卯の花に目をむけていると、思いがけない近くから松蝉の聲が流れてきます。その聲はいかにものどかで、聞いているうちに快い睡気を催してきそうです。この蝉は春蝉といい、松蝉はその別称とされていますが、松林の住人であることは間違いありません。手許の『広辞苑』を繙いてみますと「はるぜみ〔春蝉〕半翅目の昆虫。体長羽端まで3.5糎内外。形はヒグラシに似る。雄は黒色で、雌は褐色紋を散在。翅は透明で暗色点があり、末端暗色。本州・四国・九州に分布し、四月～六月上旬、最も早く松林で鳴き始める。マツゼミ。」と誌されています。毎年私が注意してきたところでは、早い年には四月下旬に鳴き始め、七月上旬、ニイニイ蝉が鳴き始める直前位まで鳴いています。これはここの松蝉に大体共通した現象のようです。また松蝉は晴れた日にしか鳴きません。よほど太陽の光を好むらしく、曇っている時に雲切れがして陽がさしてきた時などはすぐ鳴きだすのを度々耳にしました。ここの松林で聞いている限り、松蝉の数は極く僅かで、精々二、三匹ぐらいに過ぎないようです。ただ一匹だけでもその鳴く聲は二、三百メートルの範囲にはよくとおるように観測されます。従って二匹が同時に、または交互に鳴くような場合は大変賑やかに聞こえます。私は休みの日など、なんとかして、この可憐な聲の持主の姿を見たいと思って双眼鏡を手にして聲のするあたりを探しもとめたことが度々あります。しかし残念ながらその正体にはまだ一度も出会ったことはありません。僅かに松蝉の脱けがらと思われるものはこれまで二箇見つけて大事に保存してあります。全長はどちらも1.8センチですが、一方は胴体が少し大きいので、それが雌かと想像しています。外皮は、雄らしい方は少し茶がかった灰色、雌らしい方は黒ずんだ灰色です。面白いことにどちらも前足はべっこう色で、他の足より段違いに太く、先端は鋭い鎌状となっており、それで長い間土中でトンネルを掘りながら餌を求めていた生活が想像されます。

松蝉（？）の脱けがら

（大）

（小）



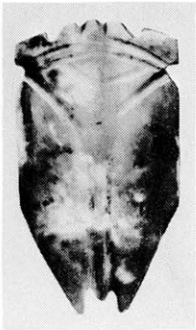
今年松蝉の聲を私がはじめて耳にしたのは、5月3日でした。例年より数日おそかったようです。私はやかましいアブラゼミ、クマゼミなどはいやが上にも暑さを感じさせるようで嫌いですが、のどかな聲の松蝉や、少し気ぜわしい点はあっても涼味と哀愁を感じさせるヒグラシ、ゆく夏をいかにも惜しむかのように鳴くツクツクボウシは誠に愛すべき昆虫だと思います。ヒグラシとツクツクボウシは子供の頃よくつかまえたものですが、その時の嬉しさは今になっても忘れえぬものがあります。手にとってみると、どちらも姿や形が素晴しく、自然の生んだ生きている宝石のような魅力を感じさせるものでした。

日本の詩歌、文学の世界で蝉を扱ったものが、どの位あるか知りませんが、すぐ頭に浮かんでくるのは俳聖芭蕉が立石寺で詠んだ「しづかさや、岩にしみいる蝉の聲」（奥の細道）や「やがて死ぬ、けしきは見えず蝉の聲」（猿蓑集巻之二、夏の部）の二句であります。

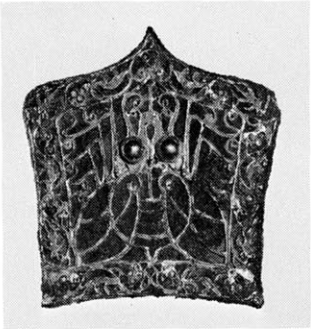
しかしここでは話題を中国古代の工芸品に限って、蝉をモティーフにした作例を少しばかり挙げて、御紹介してみることにしました。

写真(1)は東京・永青文庫所蔵（元、細川候所蔵品）の「芮伯壺（芮伯というのは周時代の王侯の名）」と称されている壺で、総高39.4糎。この壺で特筆すべき点は蝉を立体的に扱っているごとであります。この壺は清朝末の著名な蒐集家端方の旧蔵品でした。

写真(2)は京都・泉屋博古館所蔵（中国古銅器の世界的に有名な住友コレクションのことです。）の「饕餮蟬紋俎」と称されている銅器の板状の上部です。高さ18.8糎、器長41.8糎、全体の形は几状ですが、用途は儀式用の俎（まないた）で、この種のもので銅製の遺品は非常に珍しい例とされています。両側面には古代中国の殷周時代の銅器の文様として最も多く用いられた饕餮（とうてつ）というグロテスクな呪術的獣面がつけられていますが、上部の板状の部分には、かなり便化はされていますが、一見して蝉文と判断されるものが長方形に配置されてい



(3)葬玉(啥)
東京芸術大学所蔵



(4)細金細工飾金具
大和文華館所蔵

ます。以上の二例は殷周時代の古銅器で日本に在るものから選んだものですが、1976年に東京と京都の国立博物館で開催された「中華人民共和国古代青銅器展」にも蟬文のある殷代の鼎と壺のあったのを御記憶の方もあろうかと思います。

写真(3)は東京芸術大学所蔵のもので朝鮮楽浪郡遺蹟第九号墳出土の葬玉〔人間の死体を葬る時、人体の竅(ケウ・孔と同じ)を填塞するために造られた玉製品〕の一つで、口内の舌の上においた啥(かん)という玉器です。これは必ず蟬の形に作られています。今手許に文献資料がないので、断定的なことはいえませんが、啥に蟬を用いたのは、恐らく小さい体に比較して驚くべき音量を発する蟬の神秘的、超現実的魔力の象徴として、発聲と深い関係のある口内には蟬形の啥玉を選んだものであろうと想像します。この蟬形啥は黄褐色の玉で全長6.5糎です。

写真(4)は大和文華館所蔵品で、細金細工飾金具九箇の中の最も大形で長径7.3糎、保存状態も良好なものです。九箇の金具の中五箇は円形ですが、他の四箇は大小の差はありますが、いずれも形状、文様、技法は類似したものであります。細金細工といわれている技法は金を細い線と芥子粒のように小さな円い粒にしたものを用いて精巧な文様を表現する金細工のことですが、この技法の分布地域は西欧から極東に及ぶ広範囲にわたっているばかりでなく、時代も紀元前に遡るものから現代の中国にも伝えられておりますが、最も盛んであったのは中国の漢時代(201B.C〜221A.D.)朝鮮の新羅統一時代(668〜935)と見られます。殊に近年継続されている新羅の首都慶州の古墳発掘品には驚くべき多量の金製装飾金具がありますが、それらには細金細工の技法によるものが多数含まれております。

ところで、写真(4)を御覧になると、その中心になっている部分は明らかに蟬であって、しかも、その眼は大きく、かつ高く突起し、翅と胴部は繊細な金線で表現されております。大和文華館所蔵のものと全く一連のものと考えられる遺品が、米国のメトロポリタン美術館に数箇ありますが、これは他日皆様に御紹介するつもりです。これらの用途はまだ明確を欠きますが、恐らく冠帽か、或は衣服の装飾に使用されたらしいと想像されています。ともかく昆虫界ではずばぬけた歌い手の蟬が、古代人にどんな驚異と神秘感を与えたかを、現代の我々が想像してみるのも、楽しい夏の課題の一つではないでしょうか。('79—5—28)

季刊 美のたより No.47
昭和54年6月20日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.